

2020年8月23日

正午。「ヒベルニアの首都の中心」である「ネルソン記念柱の前」¹を発着する路面電車の騒音、「がったんチンチンがったんチンチン」から始まる。語りは、中央郵便局からプリンス通り、そしてフリーマン・ジャーナル社（朝刊はフリーマンズ・ジャーナル、夕刊はイヴニング・テレグラフ、また週刊のスポーツを発行）の建物へと南下してゆく。同社の広告取りであるブルームは、出納係のレッド・マリーに「アレクサンダー・キーズ」の広告を切り抜いてもらい、それをナネットィ（現場主任）の校正部屋へ持って行く。「ガシヤン、ガシヤン、ガシヤン」と騒音を奏でる印刷機（機

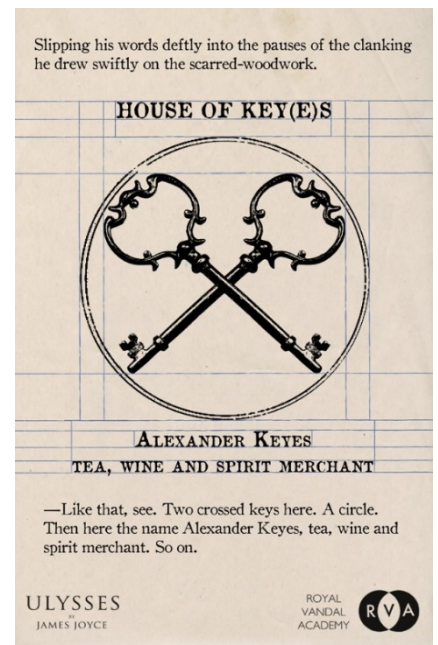


サックヴィル・ストリート（現オConnell・ストリート）
1908年のポストカードより

械）の喧しさに辟易しながらも、ブルームは無口な主任に広告の図案——二つの鍵を交差させ、円で囲む²——を説明し、更新契約の承諾を得る。階段を下りて、イヴニング・テレグラフの編集室へ入ると、そこではマッキュー先生、サイモン・デダラス、ネッド・ランバートが新聞に掲載された昨夜のダン・ドースンの演説の話で盛り上がっている。やがてJ・J・オモロイが加わり、男たちはドースンの締まりのない言葉を嘲笑うが、ブルームは「その手の駄文」がよく売れることを冷静に分析する。

奥のドアから編集長のマイルズ・クロフォードが入ってくると、サイモンとネッドはオーヴァルに飲みに出て行き、ブルームが広告のために奥のオフィスに電話を掛けに行くと、今度はレネハンが入れ違いにスポーツのゲラ刷を持ってやって来る。広告の話をもとめるためブルームが席を外すと、オマッドウン・バークに連れられたスティーヴンが口蹄疫に関するディージー

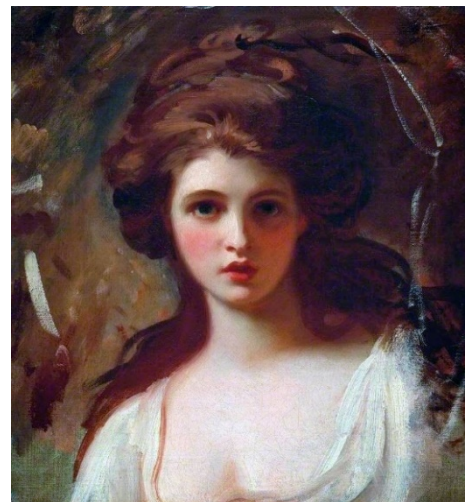
校長の投書（第二挿話）をクロフォードに手渡す。スティーヴンを新聞界に引き入れたい編集長は、イグネイシャス・ガラハーが「フィニクス公園の殺人事件」の際に見せた「天才の閃き」を熱弁する（犯人たちが載る馬車の道順を、ウィークリー・フリーマンに掲載された広告の位置で示し、いち早く返電した）。これこそが「歴史だ！」「ブン屋稼業よ」と往時を語るクロフォードは、「今の時代に」そのような気骨のある記者や弁護士がいないと嘆くが、J・J・オモロイが「チャイルズ殺害事件」の際の弁護士、シーモア・ブッシュの言葉を紹介すると、「雄弁」についての連想から今度はマッキュー先生が大学歴史協会での弁護士、ジョン・F・テイラーの即興演説——モーセの時代のエジプトとイスラエルの関係を、英愛関係に擬えたもの——を紹介する（本挿話の「学芸」は「^{レトリック}修辞学」）。



¹ 写真は下記より。 <https://www.ebay.co.uk/itm/DUBLIN-Sackville-Street-Post-Office-Nelsons-Pillar-1908-used-postcard-/303647511145>

² 写真は下記より。 <https://liberateulysses.wordpress.com/gallery/royalvandals/>

昼食がてら一杯やりに行くことが決まり、ステイーヴンはマッキューにひとつのヴィジョンを語る(“I have a vision too”)。ダブリンの街を一望したくなった「二人のダブリン不嫁後家」／「純潔を守る二人のダブリン女」(集英社訳 356)が「ネルソン記念柱のてっぺん」から「プラムの種をぷわりぷわりと吐き出す」というもので、「**ピスガ山よりパレスティナを望む、あるいはプラムの寓話**」と名付けられる。一方、広告の件でキーズ氏と面会をしてきたブルームは、クロフォードに「二カ月の更新契約」を取り付けたことを報告するが、編集長からは足蹴に扱われてしまう。ブルームを除く一行はオCONNELL通りを横断し、ジョン・グレイ像の立つ安全歩道帯で足をとめ、ネルソンの立像を見上げる。ステイーヴンが寓話の中で述べた「片手間夜鍋男(onehandled adulterer)」³という表現に、オモロイとクロフォードがくすくす笑う場面が描かれ、かくしてネルソン記念柱から始まった本挿話は再び「ヒベルニアの首都の中心」で終わる。



ジョージ・ロムニー作『キルケに扮したハミルトン夫人』(1782年)

☆登場人物紹介：() は本挿話での初登場時のページ (Dは『ダブリナーズ』を示す)⁴

レッド・マリー(204) 「赤毛のマリー」、本名ジョン・マリー。フリーマンズ・ジャーナル社の出納係。

ジョーゼフ・ナネッティ(207) フリーマンズ・ジャーナル社の印刷所監督。イタリア系のアイルランド人で、ダブリンの市議会議員を務める。のちにダブリン市長となる(1906~07年)。

ジョー・ハインズ(207) 本名ジョーゼフ・マカーシー・ハインズ。『イヴニング・テレグラフ』の記者で、ディグナムの葬儀参列者の報告記事を書く。かつてはパーネルの熱烈な支持者だった。第6挿話、D「葛の日の委員会室」にも登場。

マッキュー先生(Professor MacHugh)(215) 本名ヒュー・マッキュー。フリーマンズ・ジャーナル社の編集委員。ラテン語を教えているためか、揶揄的に「先生／教授」と呼ばれている。

ネッド・ランバート(214) 本名エドワード・J・ランバート。副大法官チャタートンの甥で、穀物商店で働く。第6挿話にも登場。

サイモン・デダラス(215) ステイーヴンの父。第6挿話にも登場。

J・J・オモロイ(217) 法廷弁護士。肺病を患っている。クロフォードに金を借りようとするが断られる。

マイルズ・クロフォード(218) 『イヴニング・テレグラフ』の編集長。コーク出身で、アルコール中毒。ステイーヴンに期待を懸けている。

T・レネハン(218) フリーマンズ・ジャーナル社の週刊スポーツ紙『スポーツ』の記者。たかり屋。D「二人の伊達男」にも登場。

オマッドゥン・バーク(228) フリーマンズ・ジャーナル社の記者。D「母」にも登場。

イグネイシャス・ガラハー(235) ロンドンに渡り、『デイリー・メール』や『イヴニング・ニュース』で活躍する新聞記者。D「小さな雲」にも登場。

³ ネルソン提督(1758~1805年)は、ジョージ・ロムニーの絵画のモデルとして活躍したエマ・ハミルトン(1765~1815年)と愛人関係にあった(エマの夫、サー・ウィリアム・ダグラス・ハミルトンもこの関係を黙認していた)。

⁴ 集英社文庫『ユリシーズ』Iの『『ユリシーズ』人物案内』(655~83頁)を参考にした。